
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 盗人《ぬすびと》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 皆|献上《けんじょう》する

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 疑問符感嘆符、1-8-77]

[# ここから1字下げ]

森の中。三人の盗人《ぬすびと》が宝を争っている。宝とは一飛びに千里飛ぶ長靴《ながぐつ》、着れば姿の隠れるマントル、鉄でもまっ二《ぷた》つに切れる剣《けん》 　　ただしいずれも見たところは、古道具らしい物ばかりである。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

第一の盗人　そのマントルをこっちへよこせ。

第二の盗人　余計《よけい》な事を云うな。その剣こそこっちへよこせ。　　おや、おれの長靴を盗んだな。

第三の盗人　この長靴はおれの物じゃないか？　貴様こそおれの物を盗んだのだ。

第一の盗人　よしよし、ではこのマントルはおれが貰って置こう。

第二の盗人　こん畜生《ちくしょう》！　貴様なぞに渡してたまるものか。

第一の盗人　よくもおれを撲《なぐ》ったな。　　おや、またおれの剣も盗んだな？

第三の盗人　何だ、このマントル泥坊め！

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから1字下げ]

三人の者が大喧嘩《おおげんか》になる。そこへ馬に跨《またが》った王子が一人、森の中の路を通りかかる。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

王子　おいおい、お前たちは何をしているのだ？　（馬から下りる）

第一の盗人　何、こいつが悪いのです。わたしの剣を盗んだ上、マントルさえよこせと云うものですから、

第三の盗人　いえ、そいつが悪いのです。マントルはわたしのを盗んだのです。

第二の盗人　いえ、こいつ等《ら》は二人とも大泥坊です。これは皆わたしのものなのですから、

第一の盗人　嘘をつけ！

第二の盗人　この大法螺吹《おおぼらふ》きめ！

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから1字下げ]

三人また喧嘩をしようとする。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

王子　待て待て。たかが古いマントルや、穴のあいた長靴ぐらい、誰がとっても好《い》いじゃないか？

第二の盗人　いえ、そうは行きません。このマントルは着たと思うと、姿の隠れるマントルなのです。

第一の盗人　どんなまた鉄の兜《かぶと》でも、この剣で切れば切れるのです。

第三の盗人　この長靴もはきさえすれば、一飛びに千里飛べるのです。

王子　なるほど、そう云う宝なら、喧嘩をするのももっともな話だ。が、それならば欲張《よくば》らずに、一つずつ分ければ好《い》いじゃないか？

第二の盗人　そんな事をしてごらんなさい。わたしの首はいつ何時《なんどき》、あの剣に切られるかわかりは

しません。

第一の盗人 いえ、それよりも困るのは、あのマントルを着られれば、何を盗まれるか知れますまい。

第二の盗人 いえ、何を盗んだ所が、あの長靴をはかなければ、思うようには逃げられない訣《わけ》です。

王子 それもなるほど一理窟《ひとりくつ》だな。では物は相談だが、わたしにみんな売ってくれないか？ そうすれば心配も入らないはずだから。

第一の盗人 どうだい、この殿様に売ってしまうのは？

第三の盗人 なるほど、それも好《い》いかも知れない。

第二の盗人 ただ値段次第だな。

王子 値段は そうだ。そのマントルの代りには、この赤いマントルをやろう、これには刺繍《ぬいとり》の縁《ふち》もついている。それからその長靴の代りには、この宝石のはいった靴をやろう。この黄金細工《きんざいく》の剣《けん》をやれば、その剣をくれても損はあるまい。どうだ、この値段では？

第二の盗人 わたしはこのマントルの代りに、そのマントルを頂きましょう。

第一の盗人と第三の盗人 わたしたちも申し分はありません。

王子 そうか。では取り換《か》えて貰おう。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから1字下げ]

王子はマントル、剣、長靴等を取り換えた後《のち》、また馬の上に跨《またが》りながら、森の中の路を行きかける。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

王子 この先に宿屋はないか？

第一の盗人 森の外へ出さえすれば「黄金《きん》の角笛《つのぶえ》」という宿屋があります。では御大事にいらっしゃい。

王子 そうか。ではさようなら。（去る）

第三の盗人 うまい商売をしたな。おれはあの長靴が、こんな靴になろうとは思わなかった。見ろ。止《と》め金《がね》には金剛石《ダイヤモンド》がついている。

第二の盗人 おれのマントルも立派《りっぱ》な物じゃないか？ これをこう着た所は、殿様のように見えるだろう。

第一の盗人 この剣も大した物だぜ。何しろ柄《つか》も鞘《さや》も黄金《きん》だからな。しかしああやすやす欺《だま》されるとは、あの王子も大莫迦《おおばか》じゃないか？

第二の盗人 しっ！ 壁に耳あり、徳利《とくり》にも口だ。まあ、どこかへ行って一杯やろう。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから1字下げ]

三人の盗人は嘲笑《あざわら》いながら、王子とは反対の路へ行ってしまう。

[#ここで字下げ終わり]

二

[#ここから1字下げ]

「黄金《きん》の角笛《つのぶえ》」と云う宿屋の酒場。酒場の隅《すみ》には王子がパンを噛《か》じっている。王子のほかにも客が七八人、これは皆村の農夫らしい。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

宿屋の主人 いよいよ王女の御婚礼《ごこんれい》があるそうだね。

第一の農夫 そう云う話だ。なんでも御壻《おむこ》になる人は、黒ん坊の王様だと云うじゃないか？

第二の農夫 しかし王女はあの王様が大嫌《だいきら》いだと云う噂《うわさ》だぜ。

第一の農夫 嫌いなればお止しなされば好《い》いのに。

主人 ところがその黒ん坊の王様は、三つの宝ものを持っている。第一が千里飛べる長靴《ながぐつ》、第二が鉄さえ切れる剣《けん》、第三が姿の隠れるマントル、それを皆 | 献上《けんじょう》すると云うものだから、欲の深いこの国の王様は、王女をやるとおっしゃったのだそうだ。

第二の農夫 御可哀《おかawaii》 そうなのは王女御一人だな。

第一の農夫 誰か王女をお助け申すものはないだろうか？

主人 いや、いろいろの国の王子の中には、そう云う人もあるそうだが、何分あの黒ん坊の王様にはかなわないから、みんな指を啣《くわ》えているのだとさ。

第二の農夫 おまけに欲の深い王様は、王女を人に盗まれないように、竜《りゅう》の番人を置いてあるそうだ

。

主人 何、竜じゃない、兵隊だそうだ。

第一の農夫 わたしが魔法《まほう》でも知っていれば、まっ先に御助け申すのだが、

主人 当り前さ、わたしも魔法を知っていれば、お前さんなどに任《まか》せて置きはしない。（一同笑い出す）

王子 （突然一同の中へ飛び出しながら）よし心配するな！ きっとわたしが助けて見せる。

一同 （驚いたように）あなたが [# 疑問符感嘆符、1-8-77]

王子 そうだ、黒ん坊の王などは何人でも来い。（腕組をしたまま、一同を見まわす）わたしは片っ端《ばし》から退治《たいじ》して見せる。

主人 ですがあの王様には、三つの宝があるそうです。第一には千里飛ぶ長靴、第二には、

王子 鉄でも切れる剣か？ そんな物はわたしも持っている。この長靴を見ろ。この剣を見ろ。この古いマントルを見ろ。黒ん坊の王が持っているのと、寸分《すんぶん》も違わない宝ばかりだ。

一同 （再び驚いたように）その靴が [# 疑問符感嘆符、1-8-77] その剣が [# 疑問符感嘆符、1-8-77]
そのマントルが [# 疑問符感嘆符、1-8-77]

主人 （疑わしそうに）しかしその長靴には、穴があいているじゃありませんか？

王子 それは穴があいている。が、穴はあいていても、一飛びに千里飛ばれるのだ。

主人 ほんとうですか？

王子 （憐《あわれ》むように）お前には嘘《うそ》だと思われるかも知れない。よし、それならば飛んで見せる。入口の戸をあけて置いてくれ。好《い》いか。飛び上ったと思うと見えなくなるぞ。

主人 その前に御勘定《おかんじょう》を頂きましょうか？

王子 何、すぐに帰って来る。土産《みやげ》には何を持って来てやろう。イタリアの柘榴《ざくろ》か、イスパニアの真桑瓜《まくわうり》か、それともずっと遠いアラビアの無花果《いちじく》か？

主人 御土産《おみやげ》ならば何でも結構です。まあ飛んで見せて下さい。

王子 では飛ぶぞ。一、二、三！

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから1字下げ]

王子は勢好《いきおいよ》く飛び上る。が、戸口へも届《とど》かない内に、どたりと尻餅《しりもち》をついてしまう。

一同どっと笑い立てる。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

主人 こんな事だろうと思ったよ。

第一の農夫 千里どころか、二三間も飛ばなかったぜ。

第二の農夫 何、千里飛んだのさ。一度千里飛んで置いて、また千里飛び返ったから、もとの所へ来てしまったのだらう。

第一の農夫 冗談《じょうだん》じゃない。そんな莫迦《ばか》な事があるものか。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから1字下げ]

一同大笑いになる。王子はすすろ起き上りながら、酒場の外へ行こうとする。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

主人 もしもし御勘定を置いて行って下さい。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから1字下げ]

王子無言のまま、金《かね》を投げる。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

第二の農夫 御土産は？

王子 （剣の柄《つか》へ手をかける）何だと？

第二の農夫 （尻ごみしながら）いえ、何とも云いはいしません。（独り語《ごと》のように）剣だけは首くらい斬《き》れるかも知れない。

主人 （なだめるように）まあ、あなたなどは御年若《おとしわか》なのですから、一先《ひとまず》御父様《おとうさま》の御国へお帰りなさい。いくらあなたが騒《さわ》いで見たところが、とても黒ん坊の王様にはかないはいしません。とかく人間と云う者は、何でも身のほどを忘れないように慎《つつし》み深くするのが上分別《じょうぶんべつ》です。

一同 そうなさい。そうなさい。悪い事は云いはしません。

王子 わたしは何でも、何でも出来ると思ったのに、（突然涙を落す）お前たちにも恥《は》ずかしい（顔を隠しながら）ああ、このまま消えてもしまいたいようだ。

第一の農夫 そのマントルを着て御覧なさい。そうすれば消えるかも知れません。

王子 畜生《ちくしょう》！（じだんだを踏む）よし、いくらでも莫迦《ばか》にしろ。わたしはきっと黒ん坊の王から可哀そうな王女を助けて見せる。長靴は千里飛ばれなかったが、まだ剣もある。マントルも、（一生懸命に）いや、空手《からて》でも助けて見せる。その時に後悔《こうかい》しないようにしろ。（気違いのように酒場を飛び出してしまふ。）

主人 困ったものだ、黒ん坊の王様に殺されなければ好《い》いが、

[# ここで字下げ終わり]

三

[# ここから 1 字下げ]

王城の庭。薔薇《ばら》の花の中に噴水《ふんすい》が上《あが》っている。始《はじめ》は誰もいない。しばらくの後《のち》、マントルを着た王子が出て来る。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して 1 字下げ]

王子 やはりこのマントルは着たと思うと、たちまち姿が隠れると見える。わたしは城の門をはいつてから、兵卒にも遇《あ》えば腰元《こしもと》にも遇《あ》った。が、誰も咎《とが》めたものはない。このマントルさえ着ていれば、この薔薇《ばら》を吹いている風のように、王女の部屋へもはいれるだろう。おや、あそこへ歩いて来たのは、噂《うわさ》に聞いた王女じゃないか？ どこかへ一時身を隠してから、何、そんな必要はない、わたしはここに立っていても、王女の眼には見えないはずだ。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから 1 字下げ]

王女は噴水の縁《ふち》へ来ると、悲しそうにため息をする。

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して 1 字下げ]

王女 わたしは何と云う不仕合せなのだろう。もう一週間もたたない内に、あの憎《にく》らしい黒ん坊の王は、わたしをアフリカへつれて行ってしまふ。

[# ここから 1 字下げ]

獅子《しし》や鰐《わに》のいるアフリカへ、（そこの芝《しば》の上に坐りながら）わたしはいつまでもこの城にいたい。この薔薇の花の中に、噴水の音を聞いていたい。……

[# ここで字下げ終わり]

[# ここから改行天付き、折り返して 1 字下げ]

王子 何と云う美しい王女だろう。わたしはたとえ命を捨てても、この王女を助けて見せる。

王女 （驚いたように王子を見ながら）誰です、あなたは？

王子 （独り語《ごと》のように）しまった！ 声を出したのは悪かったのだ！

王女 声を出したのが悪い？ 気違《きちが》いかしら？ あんな可愛い顔をしているけれども、

王子 顔？ あなたにはわたしの顔が見えるのですか？

王女 見えますわ。まあ、何を不思議《ふしぎ》そうに考えていらっしゃるの？

王子 このマントルも見えますか？

王女 ええ、ずいぶん古いマントルじゃありませんか？

王子 （落胆《らくたん》したように）わたしの姿は見えないはずなのですね。

王女 （驚いたように）どうして？

王子 これは一度着さえすれば、姿が隠れるマントルなのです。

王女 それはあの黒ん坊の王のマントルでしょう。

王子 いえ、これもそうなのです。

王女 だって姿が隠れないじゃありませんか？

王子 兵卒《へいそつ》や腰元《こしもと》に遇《あ》った時は、確かに姿が隠れたのですがね。その証拠《しょうこ》には誰に遇っても、咎《とが》められた事がなかったのですから。

王女 （笑い出す）それはそのはずですわ。そんな古いマントルを着ていらっしゃれば下男《げなん》か何かと思われるもの。

王子 下男！（落胆したように坐ってしまう）やはりこの長靴と同じ事だ。

王女 その長靴もどうかしましたの？

王子 これも千里飛ぶ長靴なのです。

王女 黒ん坊の王の長靴のように？

王子 ええ、ところがこの間《あいだ》飛んで見たら、たった二三間も飛べないのです。御覧なさい。まだ剣《けん》もあります。これは鉄でも切れるはずなのですが、

王女 何か切って御覧になって？

王子 いえ、黒ん坊の王の首を斬《き》るまでは、何も斬らないつもりなのです。

王女 あら、あなたは黒ん坊の王と、腕競《うでくら》べをなさりにいらしたの？

王子 いえ、腕競べなどに来たのじゃありません。あなたを助けに来たのです。

王女 ほんとうに？

王子 ほんとうです。

王女 まあ、嬉しい！

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから1字下げ]

突然黒ん坊の王が現れる。王子と王女とはびっくりする。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

黒ん坊の王 今日《こんにち》は。わたしは今アフリカから、一飛びに飛んで来たのです。どうです、わたしの長靴の力は？

王女 （冷淡に）ではもう一度アフリカへ行っていच्छい。

王 いや、今日《きょう》はあなたと一しょに、ゆっくり御話がしたいのです。（王子を見る）誰ですか、その下男は？

王子 下男？（腹立たしそうに立ち上る）わたしは王子です。王女を助けに来た王子です。わたしがここにいる限りは、指一本も王女にはささせません。

王 （わざと叮嚀《ていねい》に）わたしは三つの宝を持っています。あなたはそれを知っていますか？

王子 剣と長靴とマントルですか？ なるほどわたしの長靴は一町も飛ぶ事は出来ません。しかし王女と一しょならば、この長靴をはいていても、千里や二千里は驚きません。またこのマントルを御覧なさい。わたしが下男と思われたため、王女の前へも来られたのは、やはりマントルのおかげです。それでも王子の姿だけは、隠す事が出来たじゃありませんか？

王 （嘲笑《あざわら》う）生意気《なまいき》な！ わたしのマントルの力を見るが好い。（マントルを着る。同時に消え失せる）

王女 （手を打ちながら）ああ、もう消えてしまいました。わたしはあの人が消えてしまうと、ほんとうに嬉しくてたまりませんわ。

王子 ああ云うマントルも便利ですね。ちょうどわたしたちのために出来ているようです。

王 （突然また現われる。忌々《いまいま》しそうに）そうです。あなた方のために出来ているようなものです。わたしには役にも何にもたたない。（マントルを投げ捨てる）しかしわたしは剣を持っている。（急に王子を睨《にら》みながら）あなたはわたしの幸福を奪うものだ。さあ尋常に勝負をしよう。わたしの剣は鉄でも切れる。あなたの首位は何でもない。（剣を抜く）

王女 （立ち上るが早いか、王子をかばう）鉄でも切れる剣ならば、わたしの胸も突けるでしょう。さあ、一突きに突いて御覧なさい。

王 （尻ごみをしながら）いや、あなたは斬《き》れません。

王女 （嘲《あざけ》るように）まあ、この胸も突けないのですか？ 鉄でも斬れるとおっしゃった癖に！

王子 お待ちなさい。（王女を押し止《とど》めながら）王の云う事はもっともです。王の敵はわたしですから、尋常に勝負をしなければなりません。（王に）さあ、すぐに勝負をしよう。（剣を抜く）

王 年の若いのに感心な男だ。好《い》いか？ わたしの剣にさわれば命はないぞ。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから1字下げ]

王と王子と剣を打ち合せる。するとたちまち王の剣は、杖《つえ》か何か切るように、王子の剣を切ってしまう。

[#ここで字下げ終わり]

[#ここから改行天付き、折り返して1字下げ]

王 どうだ？

王子 剣は切られたのに違いない。が、わたしはこの通り、あなたの前でも笑っている。

王 ではまだ勝負を続ける気か？

王子 あたり前だ。さあ、来い。

王 もう勝負などはしないで好《い》い。（急に剣を投げ捨てる）勝ったのはあなただ。わたしの剣などは何

にもならない。

王子 （不思議そうに王を見る）なぜ？

王 なぜ？ わたしはあなたを殺した所が、王女にはいよいよ憎《にく》まれるだけだ。あなたにはそれがわからないのか？

王子 いや、わたしにはわかっている。ただあなたにはそんな事も、わかっていなそうな気がしたから。

王 （考えに沈みながら）わたしには三つの宝があれば、王女も貰えると思っていた。が、それは間違いだったらしい。

王子 （王の肩に手をかけながら）わたしも三つの宝があれば、王女を助けられると思っていた。が、それも間違いだったらしい。

王 そうだ。我々は二人とも間違っていたのだ。（王子の手を取る）さあ、綺麗《きれい》に仲直りをしましょう。わたしの失礼《しつれい》は赦《ゆる》して下さい。

王子 わたしの失礼も赦して下さい。今になって見ればわたしが勝ったか、あなたが勝ったかわからないようです。

王 いや、あなたはわたしに勝った。わたしはわたし自身に勝ったのです。（王女に）わたしはアフリカへ帰ります。どうか御安心なすして下さい。王子の剣は鉄を切る代りに、鉄よりももっと堅い、わたしの心を刺したのです。わたしはあなた方の御婚礼《ごこんれい》のために、この剣と長靴と、それからあのマントルと、三つの宝をさし上げましょう。もうこの三つの宝があれば、あなた方二人を苦しめる敵は、世界にないと思いますが、もしまた何か悪いやつがあったら、わたしの国へ知らせて下さい。わたしはいつでもアフリカから、百万の黒ん坊の騎兵《きへい》と一しょに、あなた方の敵を征伐《せいばつ》に行きます。（悲しそうに）わたしはあなたを迎えるために、アフリカの都のまん中に、大理石の御殿を建てて置きました。その御殿のまわりには、一面の蓮《はす》の花が咲いているのです。（王子に）どうかあなたはこの長靴をはいたら、時々遊びに来て下さい。

王子 きっと御馳走《ごちそう》になりに行きます。

王女 （黒ん坊の王の胸に、薔薇《ばら》の花をさしてやりながら）わたしはあなたにすまない事をしました。あなたがこんな優《やさ》しい方だとは、夢にも知らずにいたのです。どうかかんにんして下さい。ほんとうにわたしはすまない事をしました。（王の胸にすがりながら、子供のように泣き始める）

王 （王女の髪《かみ》を撫《な》でながら）有難《ありがと》う。よくそう云ってくれました。わたしも悪魔《あくま》ではありません。悪魔も同様な黒ん坊の王は御伽噺《おとぎばなし》にあるだけです。（王子に）そうじゃありませんか？

王子 そうです。（見物に向いながら）皆さん！ 我々三人は目がさめました。悪魔のような黒ん坊の王や、三つの宝を持っている王子は、御伽噺にあるだけなのです。我々はもう目がさめた以上、御伽噺の中の国には、住んでいる訣《わけ》には行きません。我々の前には霧《きり》の奥から、もっと広い世界が浮んで来ます。我々はこの薔薇と噴水との世界から、一しょにその世界へ出て行きましょう。もっと広い世界！ もっと醜《みにく》い、もっと美しい、もっと大きい御伽噺の世界！ その世界に我々を待っているものは、苦しみかまたは楽しみか、我々は何も知りません。ただ我々はその世界へ、勇ましい一隊の兵卒のように、進んで行く事を知っているだけです。[# 地から 1 字上げ]（大正十一年十二月）

[# ここで字下げ終わり]

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～11月刊行

入力：j.utiyama

校正：多羅尾伴内

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。